

# 『三遂平妖傳』は何時出版されたか？

—文字表記からのアプローチ

佐藤晴彦

## はじめに

言語の歴史的研究は、音韻、語彙、文法というのがその主たる領域であろう。現にこれまでも主としてこの三領域を中心に研究が行われてきた。しかし忘れてならないものに文字による研究がある。そこでここでは文字の方面から一つの研究方法を提起したい。むろんそうは言ってもこれまで文字面における歴史的な研究がなされなかったという意味ではもちろんない。それよりも漢字の成立に関する研究はそれこそ古代から行われてきたことであるし、最近とりわけ充実してきた「俗字」の研究などは大きな成果をあげつつあり、さらなる発展が待たれる領域でもある。

筆者がここで提起したいのは文字のそうした面からの研究ではなく、文字表記の変遷に関する問題である。では「文字表記の変遷」とはどういうことを指しているのか、一応説明する必要がある。

今われわれが普段使っている漢字のいわゆる「正字」が、正字として認識されるもしくは認定される以前には、大抵いくつかの「異体字」があった。その異体字が自然に、あるいは人為的に整理されて現在の正字に統一されてきたといえるであろう。そして異体字の多くは一種類にとどまらず、一つの漢字に対し、複数の異体字が存在していたことが多い。とすると、その複数の異体字それぞれの出現を時間軸においた時、幾種かの異体字が同時に出現したという状況は、あり得ないわけではないが、やや考え難い。例えばAと

いう漢字に異体字がA1, A2, A3, A4の四つがあったとしよう。そのA1～A4が一度に出現したとは考え難いであろう。それは恐らくA1が出現した後しばらくしてA2が使われだし、A2が出現した後しばらくしてA3が使われだし、A3が使われ始めてしばらくしてさらにA4が出現する、というように異体字の各「異体」には使われ始める時期に前後関係があった考える方が自然であろう。むろん二種の異体がほぼ同時に使われ始めるという情況も存在しなくはないだろうが。

いずれにしてもわれわれがもしその各「異体」出現の時期を明確にできたとするなら、今度はそれを根拠としてある資料にどの段階の異体字が使われているのかを明確にし、それを先の調査結果にあてはめると、出版時期がわからない資料の出版時期を明確にできるであろう。つまり出版時期が比較的明確な資料をまず調査し、その結果からそれぞれの異体字の出現時期を明確にする。例えば、A1, A2という表記は古代から使われていたが、A3, A4はもう少し出現が遅いらしい。そこでそれぞれの出現時期を、出版時期が明確な資料の調査を通じて明確にする。その結果A3, A4の出現時期が明確になった。ではそれを根拠として、出版時期がわからない資料を調査し、その資料にA3はあるのかないのか、A4はあるのかないのかを明確にする。仮にA3はあるがA4はないという結果が出た時、A4はこの時期から使われだしたわけであるから、そのA4の字体をもたないこの資料はA4出現以前のものであるという判定ができるであろう。このようにすれば、これまで成立時期や出版時期がわからなかった資料の出版時期や成立時期を明らかにすることができるはずである。

うえにあげた音韻、語彙、文法の分野が言語の歴史的研究の中心をなしていること、従ってその重要性はいうまでもないことである。しかしこの三方面での変化は非常に緩慢であり百年単位あるいは数百年単位という長期間の変遷を議論するには適してしるが、短期間の変遷を判断するには必ずしも適しているとはいえないところがある。ところが異体字の変遷となると、わ

れわれが適切な文字を選択しさえすれば、短期間の言語の変化が見てとれるのである。

小論では以上のような観点に立ち、『三遂平妖傳』を対象にとりあげ、この作品が何時出版されたかを探ってみることにしたい。

## 1. 『平妖傳』の版本

『平妖傳』の版本で重要なのは二種類ある。一つは『三遂平妖傳』（20回本。以下20回本もしくは旧本と略称する）でありもう一つは『天許齋批點北宋三遂平妖傳』（40回本。以下40回本もしくは新本と略称する）である<sup>(1)</sup>。一般的に新本は馮夢龍が旧本を基に改訂、増補をしてできたとされている。従って新本の成立は萬曆ころと思われ、出版は泰昌元年(1620)とされている。ところが旧本の方は「東原羅貫中編次、錢塘王慎修校梓」とあるが、その真偽のほどはわからない。成立時期にしても恐らく羅貫中ということからであろう、元末明初といわれるものの、根拠が明確になされないままその説が行われているのが現実である。

## 2. どの文字を根拠とするのか？

ではこの問題を解決するのに有効な文字には何を考えればよいであろうか？ 筆者はまず方位詞の“li”をその候補にあげたい。

方位詞の“li”は現在，“裏”が正字，“里”は簡体字，“裡”が繁体字というのが一般的認識であろう。ところが歴史的に見ると、宋代までは“裏”が主流であるが、元代になると“里”が使用されることが非常に多くなり、恐らく“裏”を上回る頻度ではなかったかと思われる。さらに明代になると「示す偏」に「里」を書いた“裡”“裡”という文字が使われ出し、それにやや遅れて“裡”という現行の繁体字が使われるようになったのである。就

中，“裡”という表記は明清時期非常に普及していた。それは実に清朝の末期まで使われていたらしいのであるが、民國になると“裡”にその座を譲り、現在では“裡”という文字が存在したことさえ忘れられてしまっている。では“裡”や“裡”は何時ころから使われ始めたのであろうか？まずその問題を考えてみよう。

## 2.1 方位詞“li”

“裡”（以下“裡1”と略称）と“裡”（以下“裡2”と略称）が何時ころから使われ始めたかを明確にするためには、元末明初の状況を調査する必要がある。その調査の結果が表1である。<sup>(2)</sup>なお小論では、“這裏”“那裏”の“裏”も方位詞の一部とみなしている。

表1 元末、明初中期の方位詞“li”

	裏	里	裡 <sub>1</sub>	裡 <sub>2</sub>	
1	太平樂府 (至正11年 [1351年])	87	123	4	0
2	大誥武臣 (洪武21年 [1388年])	40	0	0	0
3	辰鈞月 (永樂2年 [1404年]?)	12	10	0	0
4	義勇辭金 (永樂14年 [1416年])	10	8	0	0
5	降獅子 (〃 ?)	5	5	0	0
6	蟠桃會 (宣德4年 [1429年])	4	0	0	0
7	八僊慶壽 (〃 7年 [1432年])	14	2	0	0
8	常椿壽娼 (〃 8年 [1433年])	5	13	0	0
9	復落娼 (〃 8年 [1433年])	26	4	0	0
10	十長生會 (〃 9年 [1434年])	4	1	0	0
11	神仙會 (〃 10年 [1435年])	6	3	0	0
12	嬌紅記 (〃 ?)	55	174	0	0
13	石郎駙馬 (成化7年 [1471年])	25	1	0	0
14	薛仁貴 (〃 7年 [1471年])	13	30	0	0
15	歪烏盆 (〃 8年 [1472年])	10	3	0	0
16	朱子語類 (〃 9年 [1473年])	( ? )	( ? )	2	4
17	開宗義傳 (〃 13年 [1477年])	12	2	0	0
18	出身傳 (〃 ?年 [ ?年])	1	9	0	0
19	陳州糶米 (〃 ?年 [ ?年])	14	1	0	0
20	認母傳 (〃 ?年 [ ?年])	5	31	0	0
21	曹國舅 (〃 ?年 [ ?年])	15	19	0	0
22	張文虎 (〃 ?年 [ ?年])	5	0	0	0
23	白虎精 (〃 ?年 [ ?年])	5	1	0	0
24	看燈傳 (〃 ?年 [ ?年])	8	29	0	0
25	看孫文儀 (〃 ?年 [ ?年])	1	22	0	0
26	孝義傳 (〃 ?年 [ ?年])	1	0	0	0
27	孝兔記 (〃 ?年 [ ?年])	49	90	0	0
28	西廂記 (弘治11年 [1498年])	11	157	0	0
29	琵琶記 (嘉靖27年 [1548年])	49	148	57	1(1)
30	寶劍記 (〃 28年 [1549年])	11	88	24	0
31	古董西廂 (〃 36年 [1557年])	51	0	79	0
32	十段錦 (〃 37年 [1558年])	212	8	8	4

具体的な例をあげると次のようなものがある。

這軍便似他家裏做飯的鍋子一般， …	(大誥武臣序1.b.5) <sup>(3)</sup>
回家來心里好放不下， …	(嬌紅記53.5)
奴家是張高尚書府裡來求親。	(琵琶記上10.a.13)
若說花影裡聽琴的模樣， …	(十段錦丁8.b.6)

また、『朱子語類』に括弧をつけたのはまだ全部の調査ができておらず、塩見邦彦1985によったためである。不完全な統計を取って挙げたのは“裡1” “裡2” が使われているからである。成化本『朱子語類』はよく古い表記法を留めていて貴重な資料であることは間違いないが、それでも出版時に明人の手が全く加わらなかったというわけでないらしいことは、この“裡1” “裡2” が見えることでも推定できる。とりわけ弘治以前の他資料にはない“裡2” が見えていることが注目される。

問：“我欲仁”。曰：“才欲，便是仁在這裡。…” (朱子34.1443.6)<sup>(4)</sup>  
又曰：“德是自家有所得處在這裡。…” ( 〃 34.1395.12)

また『琵琶記』の括弧は文字そのものが不鮮明であるが，“裡2” と判読できるという意味である。

それはともかくとして、今ここでより重要なことは、

1. “裡1” は元末の『太平樂府』に若干見られるものの、あとは『朱子語類』以外全く見られず、嘉靖の『琵琶記』『寶劍記』『古董西廂』に至って増加、普及しているということ。
2. “裡2” は『朱子語類』に若干見られる程度で嘉靖でもまだ普及しているとはいえない状況であること。

の二点である。

では問題の旧本『平妖傳』はどうであろうか？ 筆者の調査では次の通りで

ある。

“裏”：4      “里”：2      “裡1”：460      “裡2”：0

表1でこの頻度にピッタリあてはまるものはないが、旧本では問題の“裡1”が大量に使われているものの、“裡2”が全くない。この現象は“裡1”が普及する嘉靖時期が最も近いといえよう。つまり旧本の出版時期は嘉靖年間であろうということが推定できる。

こう述べるときっと反発があるに違いない。曰く「たった“裡1”“裡2”という異体字の多寡で『平妖傳』の出版時期が推定できるのか？」と。筆者は推定可能だと考える。それは旧本で“裡1”が最も多く、最も普及している表記であり、且つ“裡2”はまだ出現していない、この特徴は他の資料で見た場合、最も近いのが嘉靖の資料だからである。

しかしそれでも納得できないという向きに、今一つ例を挙げてみよう。“ge”の表記法である。

## 2.1 “ge”の表記

よく知られているように、“ge”には“箇”，“個”，“个”の三つの書き方がある。そして現代では“箇”が正字，“个”が簡体字，“個”が繁体字というのが一般的な認識であろう。ところが歴史的に見ると、『説文解字』では“箇”が収録され、『儀禮』に“个”が見える。しかし“個”はない。このことから“個”が他の二字より新しい表記でることが想像できよう。“個”という表記の出現時期についてはすでに佐藤晴彦2000で論じたので贅言をついやすつもりはないが、小論の論点を明確にする意味から，“li”と同じく元末、明初中期の“ge”三種の表記法の使用情況を一覧表で示すと表2のようになる（次ページ）。

具体的には次のような例がある。

我佛看了，却是箇金毛獅子。

（降獅子4.a.10）

你是个烧火的厨子。

(寶劍記上5.b.10)

咱姐姐消得個夫人做, …

(古董解元6.3.b.7)

表2 元末、明初中期の“箇”

		箇	个	個
1	太平樂府 (至正11年 [1351])	156	92	0
2	大誥武臣 (洪武21年 [1388])	26	0	0
3	辰鈞月 (永樂2年 [1404])	52	0	0
4	義勇辭金 (〃 14年 [1416])	16	0	0
5	降獅子 (〃 14年 [1416])	11	0	0
6	蟠桃會 (宣德4年 [1429])	28	0	0
7	八僊慶壽 (〃 7年 [1432])	22	0	0
8	常椿壽 (〃 8年 [1433])	28	0	0
9	復落娼 (〃 8年 [1433])	68	0	0
10	十神長生 (〃 9年 [1434])	13	0	0
11	神仙會 (〃 10年 [1435])	40	0	0
12	嬌紅記 (〃 10年 [1435])	70	73	0
13	薛仁貴 (成化7年 [1471])	1	38	0
14	石郎駙馬 (〃 7年 [1471])	0	47	0
15	歪烏盆 (〃 8年 [1472])	0	58	0
16	開宗義 (〃 13年 [1477])	0	53	0
17	出身傳 (〃 ?年 [?])	0	21	1
18	陳州糶米 (〃 ?年 [?])	0	61	0
19	認母傳 (〃 ?年 [?])	0	36	0
20	曹國舅 (〃 ?年 [?])	5	88	0
21	張文貴 (〃 ?年 [?])	0	41	0
22	白虎精 (〃 ?年 [?])	0	13	0
23	看灯傳 (〃 ?年 [?])	1	28	3
24	看孫文義 (〃 ?年 [?])	2	35	0
25	孝白兔 (〃 ?年 [?])	0	52	0
26	白兔記 (〃 ?年 [?])	4	127	0
27	西廂記 (弘治11年 [1498])	178	0	0
28	琵琶記 (嘉靖27年 [1548])	29	213	0
29	寶劍記 (〃 28年 [1549])	117	2	0
30	古董解元 (〃 36年 [1557])	220	0	6
31	十段錦 (〃 37年 [1558])	395	1	0

表2を見ていると面白いことに気がつく。それは“箇”と“个”をめぐって明の『大誥武臣』から『神仙會』までと『薛仁貴』から『白兔記』までがちょうど逆転しているということである。つまり『神仙會』までは“箇”が使われ、“个”は一つもない。一方『薛仁貴』から『白兔記』まではそれとは逆に主として“个”が使われているが、“箇”はほとんどない。その中間に位置する『嬌紅記』はその間をとりもつように“箇”と“个”がほぼ同数である。これは3～11までが周憲王の作品であり13～26までが成化説唱詞話叢刊であるということと関係しているであろう。

周憲王の作品が“箇”で統一されているというのは、恐らく規範意識が働いたからであろう。つまり“个”という表記がなかった、もしくは知らなかったということではなく、規範からはずれているという意識が働きそれを避けたのである。『大誥武臣』も同じことである。一方成化説唱詞話はどうかというと、この資料は出版こそ成化年間であるが、元代の様相を色濃く残したものである。出版時に何らかの手が加わっているにせよ、依然として元代の様相を残している。その現れの一つが“个”という表記である。むろん元代でも“箇”は使われていたが、“个”の方が一般的であった。成化説唱詞話における“个”の表記は恐らく元代の用法の反映であろう。

翻って“個”を見てみると成化説唱詞話叢刊に計4個使われている以外は、30の『古董解元』でようやく6個使われているにすぎない。つまり嘉靖年間でもまだ普及していたとはいえない状況であり、“個”の普及はもう少し後になる。

では問題の旧本における“ge”はどうかというと、以下の通りである。

“箇”：605      “个”：113      “個”：0

この使用頻度に近い資料を表2から捜すとなると嘉靖28年の『寶劍記』が一番近い。あるいは“個”がないという点を考えれば、嘉靖27年の『琵琶記』もそれに近くなる。それはここでは“個”が使われていないというのが重要な点であって、“箇”や“个”の多少が問題になるのではないからである。

“ge”の異体字をめぐっても“li”の表記と同様、嘉靖時期が旧本の用字法の特徴に最も近いという結論に至った。

では“li”“ge”以外の文字表記ではどうであろうか。同じような状況があるのだろうか。次にそれを見ることにしよう。

## 2.2 “番”“翻”，“根”“跟”など

次に表記法に二種あり、元から明にかけてその二種の表記法が徐々にAか



らA'に定着していったいくつかの文字について見ることにしよう。それには次の5種の漢字がある。

- (1) “番” と “翻”
- (2) “根” と “跟”
- (3) “荒” と “慌”
- (4) “交” と “教”
- (5) “元” と “原”

今、これら5種の異体字の変遷の様相を一覧表にすると、表3のようになる。

表3 元末、明初中期の“番、翻” “根、跟” “荒、慌” “交、教” “元、原”

	番	翻	根	跟	荒	慌	交	教	元	原
1 太平樂府 [1351年]	10	8	7	0	3	1	27	44	10	0
2 大誥武臣 [1388年]	1	0	3	0	3	0	1	6	0	2
3 辰鈞月 [1404年]	1	0	3	0	0	1	0	6	0	3
4 義勇辭金 [1416年]	0	0	1	0	4	0	1	8	0	2
5 降獅子 [ / ]	0	0	3	0	0	0	0	2	0	0
6 桃源景 [1431年]	0	0	7	0	2	0	0	12	0	5
7 八僊慶壽 [1432年]	1	1	2	0	0	0	0	4	0	1
8 常椿壽 [1433年]	1	0	4	0	0	0	0	13	0	4
9 復落娼 [ / ]	3	0	8	0	1	0	0	8	0	2
10 十長生 [1434年]	0	0	1	0	0	0	0	2	0	1
11 神仙會 [1435年]	0	0	0	0	0	0	0	13	0	1
12 嬌紅記 [ / ]	2	1	9	0	2	0	1	50	3	0
13 石郎駙馬 [1471年]	1	0	1	0	0	1	25	0	4	1
14 薛仁貴 [ / ]	5	0	2	1	0	0	8	0	2	0
15 歪烏盆 [1472年]	0	0	0	0	0	2	30	1	17	3
16 開宗義 [1477年]	0	0	3	0	0	0	14	0	12	1
17 出身傳 [ ? ]	0	0	0	0	0	0	14	2	4	0
18 陳州糶米 [ ? ]	0	0	2	8	0	0	13	0	8	0
19 認母傳 [ ? ]	0	0	2	1	6	0	15	1	7	3
20 曹國舅 [ ? ]	3	0	8	0	7	0	53	1	35	2
21 張文貴 [ ? ]	1	1	2	3	1	0	23	0	27	2
22 白虎精 [ ? ]	0	0	0	0	0	0	9	6	15	1
23 看燈傳 [ ? ]	1	0	1	0	1	0	11	0	6	0
24 孫文儀 [ ? ]	1	0	2	0	3	0	12	0	5	0
25 孝義傳 [ ? ]	1	0	0	0	0	0	19	0	1	0
26 白兔記 [ ? ]	1	0	2	0	6	1	59	0	16	1
27 西廂記 [1498年]	5	2	10	0	9	0	1	12	12	1
28 琵琶記 [1548年]	6	2	5	0	8	1	13	106	25	0
29 寶劍記 [1549年]	6	2	3	3	6	1	0	51	1	14
30 古董解元 [1557年]	4	8	7	0	5	1	3	77	2	1
31 十段錦 [1558年]	7	7	6	15	13	(2)	1	86	10	6

(1)の“翻”という文字はむろん元以前になかったわけではない。それはこの表3の『太平樂府』にも使われているから明らかである。しかし元明時にあまり使われなかったことは、表3からも理解できよう。主として“番”が“翻”の意味で使われていた。語彙としては“番身”“番悔”“拖番”などがある。

這的是便宜番做了落便宜。 (復落娼5.a.2)

番身下了高頭馬，… (孫文儀20.b.6)

當原指腹成親，許了他，今日怎可番悔？ (十段錦己1.b.3)

(2)の“跟”も同様のことが言え、元代及び明初では“根”と書かれるのが一般的である。語彙としては“根底”“根前”“根由”“根隨”“根捉”などがある。

尚兀自我根前做些迴避。 (辰鈞月8.b.4)

猛見他荒篤速走向根底。 (桃源景26.a.8)

怕的是不知心的問起這病根由。 (嬌紅記下7.b.2)

(3) “慌てる”の意味で“荒”が使われていたのはすでに唐代から見える。

井上無懸繩，念此瓶欲沈，荒忙爲求請，遍入原上村。

(『長慶集』卷九夢井詩)

しかし立心偏がつき“慌”と書かれそれが普及するのは明代からであり、『太平樂府』に見える例は元代では珍しい例ではないかと思われる。語彙としては“荒忙”のほか、“荒獐”“荒張”“荒促”“荒篤速”などがある。また“～的荒”も見られる。

張龍趙虎荒忙轉，… (認母傳4.a.5)

李大公來的荒く獐く，不曾買的好香。 (白兔記8.b.9)

你每不要荒張，… (十段錦辛5.b.5)

這兩日悶倦的荒了。

(寶劍記下44.b.4)

(4)使役の“教”は唐代から“交”とも書かれるようになり<sup>(5)</sup>、それがそのまま元代、明初まで続き、それ以降徐々に“教”に統一されていく。

交奴舉眼看何人？

(歪烏盆2.b.12)

喝交公牌忙下手。

(曹國舅5.a.13)

(5)現在“原来”と書かれる語は古くは“元來”と書かれた。日本語の表記と同じである。それは唐代からすでにそうであった。しかし明代になると、恐らく忌避からであろう、現在のように“原来”と書かれるようになってきた。また“原因”などの語も元代では“元因”と書かれるのが一般的である。“縁故”を“元故”と書くこともある。

元來却是麵烏盆。

(白虎精8.b.4)

爺く听我說元因。

(開宗義4.b.12)

表3を眺めていると興味深いことに気がつく。それは表2と同じように周憲王の作品(3~11)と成化説唱詞話叢刊(13~26)に見られる対立である。周憲王の作品は永楽、宣徳など明の初期に創作されたもの、成化説唱詞話は文字通り成化年間に出版されたものである。しかしながら、説唱詞話叢刊の方は印刷の様相や文字などから一見して元代の影響を色濃く残していることがわかる。表3の周憲王と説唱詞話とを比べてみると

1) “番”と“翻”，“根”と“跟”，“荒”と“慌”に関しては明確な対立は示していない。

2) ところが“交”と“教”，“元”と“原”となると極めて明確な対立がある。それは周憲王の作品が“交”と“教”では“教”を，“元”と“原”では“原”を使うのに対し、説唱詞話は逆にそれぞれ“交”“元”を使っ

ているということ。

である。この現象は何を物語っているのでしょうか？その原因を考えてみると、恐らく次の理由によるものであろう。

1) 周憲王の作品は、明代の初期という元代との時間的なつながりから、依然としてやや古い表記が受け継がれていた。つまり“番”“根”“荒”など一部は元代のやや古い表記法を受け継がれたものであろう。しかし説唱詞話叢刊の方は本来が元代のものであるが、成化年間に出版される時、ある程度明代の手が加わった。その結果が“番”と“翻”，“根”と“跟”，“荒”と“慌”の各字二種の表記がともに使われているという現象に現れているのであろう。具体的な例をあげると、説唱詞話の『陳州糶米』『張文貴』の“根”と“跟”の頻度がそれぞれ2：8と2：3になっているが、これは明代に手が加わった結果であろうと推定される。

2) しかし他の二種の漢字は、周憲王の時代になると一つの表記法に統一されていく過程にあった。それが“交”と“教”，“元”と“原”に見られる現象ではないか。とりわけ“元”から“原”への移行は、恐らく明太祖朱元璋の忌避も手伝って、かなり急速に移行していったのではないかと推定される。ところが説唱詞話の方はこの二種に関してはあまり手が加えられなかったのではないだろうか。それは偶然の所産という極めて恣意的な原因によるものであろう。

以上、5種の異体字について元末、明初の状況を見てきたわけであるが、では問題の旧本において、この5種の異体字の使用状況はどのようになっているのであろうか？ 筆者の調査によれば次のようになっている。

表4 旧本における“番、翻”“根、跟”“荒、慌”“交、教”“元、原”

	番	翻	根	跟	荒	慌	交	教	元	原
平妖傳	11	0	0	9	22	14	267	5	20	10

表3の資料で、旧本における5種の異体字の頻度にぴったりあてはまる資

料を捜すのはまず不可能である。近似値を求めるほかないであろう。(1)の“番，翻”の頻度にあてはまる資料は相当あるため，その資料を特定するのは難しい。(2)の“根，跟”は通し番号でいえば18，21，31が近い。(3)の“荒，慌”は両方とも使われ，且つ“荒”が多い資料という条件となると，1，2，4，6，27～31がある。(4)の“交，教”は13～26が近い。(5)の“元，原”は12～28，30，31が近い。

結局(4)の“交，教”を除くと31の嘉靖37年の『十段錦』が最も近いということになる。そして“交，教”の使用頻度で両者が全く合致しないのは，旧本が元代もしくは明初の状態を留めていることに起因していると思われる。

ここで些か複雑な問題を考えなければならないことになってきた。それは筆者がここまで半ば意識的に避けてきた問題である。それはあまりにも多くの推定を重ねなければ説明できないようなことがらなので避けてきた。

現在われわれが目撃することができる旧本は，一部清朝の補刻がなされているという<sup>(6)</sup>。筆者が旧本の出版と呼んでいるのは，もちろん補刻がなされたそれではなく，その一段前の版を意識してのことである。それが嘉靖年間ではないかという推定である。

しかし嘉靖年間と結論づけるには(4)の“交，教”の使用頻度の説明がどうしてもつかない。むしろ旧本だけを「用字上例外であって，“交”が多用された」という特殊扱いも可能であり，その可能性も否定はできない。しかしもう一つの可能性も考えられる。それは嘉靖以前に何らかの原初形態としての版があったのではないかという推定である。

## ま と め

以上，元明期の文字表記を根拠として『三遂平妖傳』の出版時期を嘉靖年間と推定した。2.1の方位詞“li”や2.2の量詞“ge”のように，異体字の一種が何時から使われ始めたかを特定できると議論は進めやすい。しかし

2.3のように二種の文字表記が並行して行われている場合は、やや判断に苦しむ。さらに資料によっては明初に書き下ろされたものと、元代から受け継がれ明代に手が加わったものとのがあり、的確な判定を下すのをより難しくしている。今後は両者—明代の書き下ろしと元代から受け継がれて明代に手が加わったもの—を別々に扱う必要があるだろう。そうすればもう少しきめ細かな議論ができるようになるであろう。

筆者がここまで文字表記に拘るのは、単にこの方法によれば今まで出版時期が明確でなかった資料を明確にできるという意味だけではない。むしろそれも重要ではあるが、今一つ所謂通俗文学における異体字の淘汰、正字への統合という漢字文化のもう一つの側面を見ることができるといふところにある。

思うに中国の伝統的な古典の世界では、宋代に大きな転機を迎えた。それは宋版が出版されることで異体字の整理が非常にすすみ、それまでの所謂「俗字」が文字通り俗字として排除され、漢字の一つの規範ができたと言ってよいであろう。しかし、小説や戯曲などいわゆる「俗文学」の世界では、その発達がやや遅れた点、むしろ元代以降に文字表記の問題が現れ、人々はさまざまな試行錯誤を繰り返し、異体字を考案してはさらにその整理を行ってきた。それはさほど意識的に行われたのではなく、ほとんど無意識的に行われ、元代、明代を通じて異体字をめぐる淘汰が徐々に進み、その完成を見たのは清末から民國にかけてではないかと思われる。

さらに興味あることは、今日われわれが「繁体字の正字」と認めている文字が、歴史的には最も遅く出現した文字もあるという点である。例えば小論でも扱った方位詞の“li”のうち、“裡”という表記は今日繁体字として認められているが、歴史的には最も新しく使われ始めた表記である。また小論では扱っていないが、数詞の“兩”という文字も、“两”“兩”“両”よりは遅れて出現した表記である。こうした文字表記の問題も今日ほとんど意識にのぼったこともなく等閑視されてきた。漢字の歴史的変遷を考えるうえで今後

の研究課題とすべきであろう。

注

(1) 小論ではそれぞれ次の版本を使用した。

旧本：『三遂平妖傳』天理図書館善本叢書漢籍之部第12卷(八木書店, 1981)

新本：『天許齋批點北宋三遂平妖傳』内閣文庫蔵

(2) 使用したテキストはそれぞれ以下の通り。

太平樂府：四部叢刊本

大誥武臣：『皇明制書』上卷(1966年1月, 古典研究会)

辰 鈞 月：周藩原刻本(中央研究院歷史語言研究所傅斯年圖書館本)

義勇辭金：　　〃　　(影印本, 『全明雜劇4』所收)

降 獅 子：　　〃　　〃

蟠 桃 會：　　〃　　(中央研究院歷史語言研究所傅斯年圖書館本)

八僊慶壽：　　〃　　〃

常 椿 壽：　　〃　　〃

復 落 娼：　　〃　　〃

十 長 生：　　〃　　〃

神 仙 會：　　〃　　〃

嬌 紅 記：『古本戲曲叢刊初集』

石郎駙馬：『明成化說唱詞話叢刊』(臺灣鼎文書局, 1979年影印本所收)

薛 仁 貴：　　〃　　〃

歪 烏 盆：　　〃　　〃

開 宗 義：　　〃　　〃

出 身 傳：　　〃　　〃

陳州糶米：　　〃　　〃

認 母 傳：　　〃　　〃

曹 國 舅：　　〃　　〃

張 文 貴：　　〃　　〃

白 虎 精：　　〃　　〃

看 灯 傳：　　〃　　〃

孫 文 儀：　　〃　　〃

孝 義 傳：　　〃　　〃

白 兔 記：　　〃　　〃

朱子語類：明成化九年江西藩司覆刊(臺灣正中書局, 1973年影印本)

西 廂 記：『奇妙全相註釋西廂記』(臺灣世界書局, 1976年影印本)

琵琶記：『新刊元本蔡伯喈琵琶記』(『全明傳奇』所收。但し, 不鮮明な箇所は『古本戲曲叢刊初集』本で確認した)

寶 劍 記：『古本戲曲叢刊初集』

古董西廂：『古本董解元西廂記』中華書局，1963年影印本

十段錦：『雜劇十段錦』嘉靖戊午仲夏紹陶室刊

- (3) 『大誥武臣』序の第一葉，裏，五行目を表す。以下の例もこれに倣う。
- (4) 成化本『朱子語類』の巻数，頁数，行数を示す。
- (5) 太田辰夫 1958, p.241
- (6) 横山 弘 1981, p.52

#### 参考文献

太田辰夫 1958『中国語歴史文法』江南書院

佐藤晴彦 2000「元明期の文字表記—〈個〉の出現をめぐる—」『神戸外大論叢』第51巻第6号

塩見邦彦 1985『朱子語類口語語彙索引』（中文出版社）

横山 弘 1981「三遂平妖傳解説」『三遂平妖傳』（天理図書館善本叢書漢籍之部12）所収